

チェルノブイリ通信

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局

連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号

Tel·Fax 093(681)1780

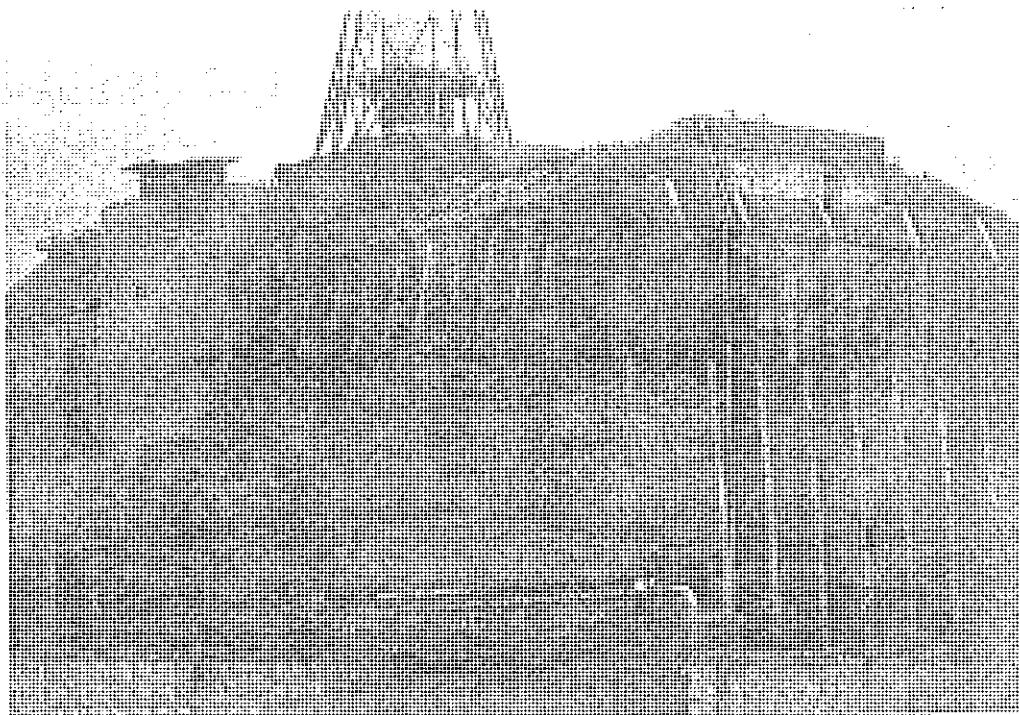
口座番号 福岡7-65328

加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1994年8月1日

No.

26



石棺もボロボロになりつつある

ありがとう！感謝の気持ちをこめて

チェルノブイリ原発事故後、幾年月が過ぎました。幸いなことに、世界の人々は、この惨事に見舞われた私達の国を突き離しはしなかったのです。年毎に、ますます、私達は全世界の国々で親しい友人たちと相互理解を見いだしています。私と同胞たちは、私達と同じように1986年4月26日という日を理解し、感じとっている素晴らしい日本の皆さん方に感謝しています。一これはベラルーシの人々にとっての惨事であるばかりでなく、核エネルギーの危険性に関する全地球の人々に対する警告なのです。

私や他の小児科医はチェルノブイリ事故後、この災難が人々の健康にどれほどの不幸をもたらしたかを目の当たりにしました。私は世界の優れた医学の一つ、日本の医学を学ぶためにやって来ました。日本の医師が使用するもっとも優れた医学機器、私達の国の子供たちを支援して下さる組織、甲状腺病の病人の治療方法などが知りたかったのです。

私はあらゆる大学病院と私が働いていた病院（医院）：大分協和病院、大分県立病院、野口病院、松本小児科病院で、大らかな心を持った善良な素晴らしい人々に出会いました。

今日、立派な機器と高度の技術を有する日本の医師たちなら必ず治療できるであろう臍皮病（日本にはないと思います）の様な病人たちが、自分の国では死の運命を負わせられていると思うと、私は痛ましくなりません。ここ日本で私が見たもの、聞いたもの、知ったもの、すべてのものを私は自分の国ベラルーシに持ち帰ります。そしてこれらは私達（私と日本）からのもう一つの支援になるでしょう。

もう一度、ここ日本で私達の研修を企画して下さった皆様方に絶大なる感謝の言葉を述べるとともに、とりわけ九州で設立された”チェルノブイリ支援運動”団体に感謝します。

日差しは暑かったですが、日本の素晴らしいものを見ることができて良かった、と思われてなりません。

敬意を込めて。

医師、ガリーナ・チェルヌイショーバ
ベラルーシ、モズィリ市
1994, 7, 16

チェルノブイリ通信No.26号を お届けします

酷暑の中ですが、暑中お見舞いを申し上げます。とんでもない暑さが続いています。皆様にはいかがお過ごしでしょうか。この通信が届く頃には、多少なりとも涼しくなっていることを期待しています。

第四次調査団が出発し、帰国。そしてモズィリ市子供病院の小児科医ガリーナさんの一ヶ月間にわたる九州での医療研修と、二ヶ月の日々が過ぎてしましました。一体の通信はいつ届くのだろうか、と首を長くして待っておられた方もいると思いますが、お許しください。医療研修の報告も合わせて通信をだそうと思っていましたので、遅くなりました。同封のチラシも、支援運動・九州としてははじめてのカラー刷りのチラシとなりました。

長い文章を書いた報告集よりも、一目でわかる（わかりやすい）チラシの方が役に立つのではないかということで、一年間使える（？）チラシを作つてみました。まったくのしろうとが作つたにしてはなかなかの出来栄えだと自画自賛しています。

なお、このチラシを余分に必要な方は事務所までご連絡ください。可能なかぎりお届けします。

◇ ◇

さて今回の通信は、第四次調査団報

告、医療研修報告が中心になります。また、通信の発行頻度についても、これまでの2ヶ月に一回を、3ヶ月ごとにということで考えています。（もちろん郵便料金の値上げににともなう経費の関係のためですが。）この件について、なにかご意見のある方は、ご連絡ください。もちろん、急を要するような時は通信を発行しますが、今後は基本的には3ヶ月ごとということで、ご理解いただきたいと思います。

また、それぞれの地域で、チェルノブイリの今の状況が知りたい、必要だ、という時には、その都度連絡してください。知り得る情報については整理してお届けします。

「サナトリウム・九州」の 子ども達

昨年はサナトリウムが改修工事の最中だったので、子ども達との感激の対面は空振りに終わりましたが、今回は112人の子ども達が私たちを出迎えてくれました。

1992年12月にオープンした
「サナトリウム・九州」。旧ソ連時代
のオリンピック選手用のリハビリス

ーツ施設の一部（ゲストハウスを一棟）を改修し、サナトリウムとして子ども達に解放しています。ミンスク市から西へ25キロ、こんもりとした森の中に建つサナトリウム。医療棟、教室、サウナ、プール、体育館、ディスコ、映画ホールなどが備わっており、寒さの厳しい冬でも、長雨の季節でも快適に利用できます。

汚染地に住む子ども達が、教師に引率されて3週間サイクルで保養にやってきます。これまでに2000人近い子ども達がやってきました。オープン当初は食事も大人並で、脂肪分の多いメニューでしたが、いまではビタミンたっぷりのヘルシーな食事となっていました。

私たちがサナトリウムを訪問したときには、10才から11才の子ども達が112人入所していました。（私たちが帰るときモズィリ市の子ども達が10人入ってきたので122人）。マリノフカからやってきた子ども達でした。

■ マリノフカ地区

1992年、ミンスク市に汚染地からの移住者のための町がつくられました。マリノフカ地区とシャバニ地区です。現在、マリノフカには1万1千人、シャバニには5千人の移住者が暮らしています。移住してきた人たちの生活はどうなのだろうか。引率で来ていた先生に聞いてみた。ゴメリ州のベットカ地区で養護学校の教師をしていたが、

92年にミンスクに移住し、今は204小学校で教師をしているナタリヤさんです。

『移住してきた人たちの生活の保障はどうなっていますか？』

『仕事の問題を含め、生活の保障は厳しい。たとえば農民たちは仕事がないので、汚染地の自分たちの畑で作物を作り、それをミンスクの自由市場で売っている。そうしなければ生活していけない状況です』。

子ども達にも聞いてみた。名前はジーマ君、11才である。

『ここにくる前はどこに住んでいたのです？』。

『ブランギン。6年間ゾーンで暮らしてたの。今の調子はいい。両親も兄弟も元気』。

『どうして移住できたの？』。

『家族の誰かが病気にかかると、病院で登録され、移住できる』といいます。法律的には移住しなければいけない地区（1平方キロ当たり15キュリー以上の地域）に住んでいても、経済的な問題で全員を移住させることはできません。何らかの基準があるのではと思っていましたが、何と「病気になること」が移住の条件だったのです。

ほかの子ども達にも聞いてみた。

『君たちはどこから来たの？』

『ナローブリヤ』（6人）『チェチエルスク』（4人）『ブランギン』（6人）『コールマ』（2人）……と、さすがに聞いたことのある名前ばかりです。

■ 汚染地だけれど故郷に帰りたい！

故郷のことを聞いてみた。『君たちの生まれた故郷は、放射能で汚染されています。とても悲しいことです。たぶん君たちが大人になっても汚染は消えないかもしれません。いまでも故郷のことを思い出しますか？』。

『なつかしい』。『はやく帰りたい』。『帰りたいの？』と聞いたところ、一齊に全員の口から、『帰りたい』の声が。

『だって、友達もいっぱい残っているし、事故がなかったら今でもそこで生活していたんだ』という。

『そうか、君たちの友達はまだいっぱいそこにいるんだ。友達に会いたい？』

『会いたい！』。

30キロゾーンにさえ、いまでは7千人くらいの人々が「こっそり」と帰ってきているといいます。もちろん老人たちではありますが。子ども達でも「友達は残っているんだから帰りたい」といいます。害になるもの（放射能）が目に見えないと、そうなるのかもしれない。

子どもの甲状腺ガン 264人に

ミンスクで小児血液病センターと放射線医学センター付属病院を訪ねました。

ミンスク第一病院小児血液病センターはベラルーシ共和国の小児血液病のセンターであり、最も症状の重い子ど

も達が送られてきます。ベッド数は100床。アレイニコバ女医に話を聞きました。

『この病院は、全ベラルーシから白血病の子ども達が送られてきます。ここで6カ月から8カ月の化学治療を受け帰ります。現在はドイツのBFMプロトコールで治療を行なっており、治療の成功率は70%前後です。子どもの白血病について事故前と事故後ではその発生率に大きな違いは見られない。しかし、今後少しづつ増えるかも知れない。傾向としては、ゴメリ州の21地区、プレスト州の6地区に白血病が多く発している。また、4歳までの子どもに白血病が出ている』そうです。

病院の庭には、ドイツの民間援助で建てられた二階建ての病棟がありました。チェルノブイリの事故後、病棟が手狭になったため、ドイツの市民グループが二階建ての簡易施設を提供しました。現在、外来患者のための施設として利用されていました。

放射線医学センター付属病院にもドイツの援助で大きな外科病棟が建てられています。ミンスク郊外、政府高官専用のサナトリウムだった施設を改修し、チェルノブイリの被害者のために解放した付属病院。現在は治療のみで手術は第一病院で行います。そのために、外科病棟が建設中でした。とは、去年の話なのですが、今年訪問した際も、まだまだ建設の途中でした。

『ずいぶんと時間がかかりますね』と聞いたところ、『この施設はドイツの援助によって建てられています。この外科病棟が出来上がればここですべ

て出来るようになります』という答えが。何と、この施設にもドイツの援助が。お金が予定通り集まらないため、工事も遅れ遅れになっているようです。それにしても、ドイツの民間援助はスゴイ！。

さて、この病院はペラルーシ全体の甲状腺治療のセンターになっています。

昨年までは大人も子どももベッド数は100床づつでしたが、今年から子どもが110床に増えていました。それだけ子どもの患者が増えているわけです。子どもの甲状腺ガンは昨年3月末で157人でしたが、今年4月末の段階で264人に増えています。

ゴメリ州出身のオクサーナちゃん。「2年前から少しづつ甲状腺の肥大が始まった。治療のためにやってきた」サーシャ君（10才）。「5月に第一病院で甲状腺ガンの手術をした」。この病院では3週間程度、入院・治療をするが、転移の恐れがあるときには長くなる。タニヤちゃん。ブレスト州出身（14才）。2年前手術をして、今回再検査のためにやってきた。

その他、甲状腺に異常があるわけではないが、検査のために10人ぐらいの子どもたちがブレスト州からやってきていた。

■ 蓄積する体内ヒバク

案内されてやってきたのは、タニヤちゃん（13才）、ニコライ君（12才）、ミーシャ君（11才）で、いずれもブレスト州出身の3人です。

『この子どもたちは病気ではありませんが、検査のために1年間この病院で過ごします。体から放射能が検出されるのです』という。詳しく話を聞いたところ、ホールボディーカウンターで計ったところ、最高で1・5マイクロキュリーの放射線をカウントしたといいます。タニヤちゃんで1・17マイクロキュリー。とんでもない高い値です。この病院で尿を計ったところやはりセシウムやストロンチウムが検出されました。同じ様な話をゴメリ州ナローブリヤ市でも聞きました。まだまだ、汚染は続いている。放射能は子どもたちの体をむしばみ続けているのです。

（次号にて、モズィリ市、ナローブリヤ市の報告をします。） 深江



悲劇は終わらない！

秋月 初美

四回目を迎える今回の調査団は、サナトリウムのあるミンスク市、昨年来日した「パレスカヤ・ゾーラチカ」の住むモズィリ市、切尔ノブイリ原発から50kmほどの所にあるナローブリヤ市を訪ねた。ナローブリヤ市というところは汚染がひどく、事故直後から町全体の移住計画があったので、地図からも名前が消えたそうだが、現に、いまでも1万3千人の人々が住み、そのうち800人の幼稚園児を含む2千人の子ども達が住んでいるところである。

今度の旅で四つの大きな病院（おもに子ども病棟や子ども病院）を見て回った、どの病院にもいえることは建物が古く（これは国の事情なのかもしれないが）設備がまったく不十分であるということだ。照明も暗く、柳樂先生は日本の二〇年前とていてるとおっしゃっていた。

四つの病院のうち、手術設備の整っている病院は、たった一つしかなく、そのミンスクの第一病院には、全ペラルーシから、手術を必要とする人たちが集まってくるという状況である。新しく外国の民間援助を受けたりして、手術設備の整った病院ができるという話は聞くが、いつ建つかはっきりしていない。病気の子ども達を受け入れ

るベッドの数が不足しているので、軍の保養所を放射能医学治療所などに変えて対応しているが、まだまだ不十分である。

甲状腺異常を検査するエコーなども、支援運動などでもっていった数台があるにすぎない。

病院の子ども達は、髪が抜けおちている子、それを隠すためにバンダナを巻いている美しい少女、甲状腺のあとがみえる小さな子、のどが異常に腫れている子……。あとけないそれぞれの瞳に暗いものを感じてしまった。

今回、7人のお医者さんに、お話をうかがうことができた。それをまとめてみると白血病の発生率は、事故の後、それほど有為な上昇傾向はないが、白血病の前の病気である貧血症状などが増えている事、甲状腺異常はとっても増えているということ、7人の先生方すべてが、この状態は、年々ひどくなるだろうと予測していること、レンギングラードの医師団が、幼稚園児を調べたら、400人のうち1人しか健康ではなかったということであった。

そして、事故後に生まれた子ども達の今一番の心配事は、学校での集中力が弱いことや、健康的でない（風邪をひきやすい）ということだそうだ。そして、ほとんどの子どもは、2~3の

慢性病を持っているということである。

事故後8年、日本ではすでに忘れかけている人たちがいるかもしれないが、子ども達にとっては、今まさに病気との闘いがくり広げられているのである。

■ 汚染ゾーン、でも食べるしかない

30キロゾーンに入って、放射能を測定してみたが、驚くほどの数値は見られなかった。しかし、今一番怖いのは、食物を通しての内部被爆であると思う。

放射能の怖いところは、目に見えないことである。私自身が一番驚いたことは、この汚染のひどいナローブリヤで食事をするとき、私も最初は、この食べ物はきっと汚染されているだろうなあと思いはしたが、食べるものがなければそれを食べるしかないし、わずか数日しか滞在していない私でさえ、そのうち汚染のことなんか忘れてはいても外国の食物は高くて買えず、この地区の人々が食べるもののうち70%はここで獲れた物である。

8年間、しかたなしに食べ、いつのまにか警戒心すらうすれ、この地に生き続けている人々。大人への影響が現われるのには、時間がかかるけど、小さな子ども達は年々不健康になってしまっている。こういう状況の子ども達を、少しの期間でも、汚染のないところで過ごさせるという意味でサナトリウム・九州の存在は、この国の大人们子ども達にも評判になっているとい

うことだ。

今、この国の子ども達が一番必要としていることは、汚染のない、環境の良い所で、安心できる食べ物を食べ、体とともに心の健康を保つことである。

以上の全てをそなえ、ここにしかない検査機器で検査をし、ビタミン不足が大きな問題の子ども達にビタミン剤をあたえ、マッサージをしたり、たまにディスコをしたりしているこのサナトリウムの存在は大きいと思う。

医学的には、1ヶ月の保養では何の効果もないかもしれない。しかし、子ども達と共に生活し、子ども達の顔を見て思うことは、精神的效果は大変大きいのではないかということである。

私達がいた時、サナトリウムには12人の子ども達がいた。名もないナローブリヤにさえ、2千人の子ども達がいるというのに、サナトリウムの数が少なすぎる。この国には今それを造る経済力がない。来年まで待てないのである。今、子ども達は救いをもとめている。

心温かい支援の輪が、いっそう広がることを心から望んでいる。



1986 год.

Лето.

Я на приро-
де.

Фото
моего
папы.

チェルノブイリの汚染地帯を訪れて

大分協和病院 なぎら つよし

このたび、「チェルノブイリ支援運動・九州」からの突然の要請を受けて、私自身の目的意識を十分整理できないままに、第4次調査団に参加することになった。すでに、第1次調査団に参加された伊勢泰医師によって、くわしく医療報告がなされている。その中で、「ウクライナ、ベラルーシ両共和国では、わが国の医療レベルと比べて少なくとも20年の開きがある」とこと、「医療機器と薬品が不足している」事実、「汚染地区では、潜在的にヨード不足の状態にある小児の甲状腺において、放射線性甲状腺炎が起こり、続いて甲状腺ガンや橋本病（慢性甲状腺炎）が経験され」、「白血病、リンパ腫、肺ガン、胃ガン、鼻咽頭ガンの増加が指摘されている」とこと、「白血球減少、免疫不全による易感染性、神経系の異常などが増えており」、「乳幼児の死亡率が高くなっている、感染症による死亡が目立つ」とことなどが報告されている。

続いて伊勢医師は、次の世代に対する催奇形の問題の懸念と、積極的な発ガン防止対策の必要性を指摘している。

第1次調査団が派遣された1991年以後、日本から多くの医師団、医

療調査団が現地を訪れており、いくつかの医学論文、報告書が出されてきている。それらの中で、小児における「硬化性甲状腺腫sclerosing struma」の増加、小児甲状腺癌の増加、先天異常の増加、腫瘍免疫の一環であるナチュラル・キラー（NK）細胞の活性低下が医学的に証明されている。このように、原発事故以後、増加していると言われている健康障害の種類が多いが、増加を医学的に証明されているものは必ずしも多くはないのである。

今回の短期間の訪問によって、これらの医学調査に匹敵するような調査を行うことはとうてい無理であり、現地の実態に触れて、今後の支援運動の進め方に関する指針を得ることを目的とした。

（1）汚染地帯における健康被害について

今回訪問した医療機関は、ミンスク小児血液病センター、放射線医学研究所付属病院、モズィリ市小児病院、ナローブリア市立病院、スタイキ・サントリウム診療所であった。

これらの医療機関において、原発事

故後に増加しているとの報告を受けた健康障害は次のようなものである。

- ①血液疾患……白血病、白血球減少、各種の貧血
- ②甲状腺疾患……ガン（主に小児）、慢性甲状腺炎、機能低下症、「硬化性甲状腺腫」
- ③免疫系障害……NK細胞活性低下など。
- ④悪性腫瘍……白血病、甲状腺ガン、乳ガンなど
- ⑤先天異常……四肢異常、小頭症など
- ⑥異常出産……新生児仮死、ハイリスク児の増加など
- ⑦アレルギー疾患
- ⑧神経症
- ⑨栄養不良状態……ビタミン欠乏など
- ⑩易感染傾向……肺結核、気管支炎他の増加
- ⑪寿命短縮、青壯年死亡の増加

これらの健康障害の増加は、病院での患者統計や臨床の場での印象に基づいて報告されているものが多く、明確な根拠に基づいているものはあまり多くはない。すなわち、白血球減少、貧血、甲状腺ガン、甲状腺障害、免疫系障害、先天異常などについては、明確な医学的根拠あるいは疫学的根拠にもとづいているが、その他のものについては明らかに増加していることを証明するためには疫学調査が不足している。

今回の調査を通して、どのような疫学調査がなされているのか、なされている場合にはその結果の如何について関心を持った。しかし今回は疫学調査

資料を手に入れるることはできず、放射線医学研究所の弁では、疫学調査は現在進行中であり、またWHOとの合同企画として、健康障害と放射線との関連性についての疫学調査が本年から始められるとのことであった。

甲状腺ガンでも、先天異常の場合でも、その原因は単一ではなく、放射線以外にも多くのものが考えられる。たとえば甲状腺ガンの場合には、元来きわめてまれにしか発生しない小児において多発している原因としては放射性ヨード以外には考えられないが、発病を促進する因子として潜在性のヨード不足や個体の感受性の差などが考えられる。

また、甲状腺ガンのように放射線の一次的影響によるものもあれば、アレルギー、易感染症のように二次的影響によるものもある。さらに、貧血のように鉄分不足、栄養不良との複合的影響にもとづくものもある。

このような疾病と原因（多要因）との関係を究明する方法が「疫学」であり、チェルノブイリの被災地において当面可能な方法は、case-control study（症例対照研究）である。世界中の疫学者や放射線医学研究者が注目している中で、今後被害実態が解明されていくことが期待される。

伊勢医師によって「わが国と比べて20年以上の開き」と報告されている医療レベルについての印象を記してみたい。大まかに言って、ミンスクの中心部を除いては、20～30年前の日本の医療現場を見ているという感じで

あつた。

医療機器や医薬品が手に入りにくくいうことは前から聞いていた。しかし、日本では簡単に手に入るビタミン剤、鉄剤、一部の抗生剤、手術用の糸や手袋、ベビーフードなどがきわめて入手困難であるという事実にはおどろかされた。このような基本的な医療材料・医薬品は、30年前の日本においてもたやすく入手できたものである。高価な医療機器ならともかくも、ごく一般的な薬品が現場で不足しているということは、単に医学、医療の問題にとどまらず、流通機構に大きな欠陥があることを示している。とすれば、薬品に限らず、多くの生活必需物品や産業関連物資においても同様の状況があることが容易に想像され、流通産業の整備は緊急の課題であろう。

ペラルーシでは、計画経済から市場経済への移行期に入りつつあるが、医療は今なお国営である。第1次～2次～3次医療というシステムは整っていて、全国民をもれなくカバーしている。したがって、今回の原発事故のような大災害に際して、患者統計をとり、どのような疾病が増加しているかを把握する上ではシステムとしてはすぐれているはずである。

しかし、このような国営のシステムは、他の産業と同様であろうが、医療機関相互や医師間での競争をうながすことはなく、医療供給を量的な面では保証しても、質的な面では不十分なものにならざるをえないであろう。今回の数の少ない医療機関の訪問を通して、その点は強く感じられた。

汚染地域から避難して来た子供達を対象に「サナトリウム・九州」が運営されている。サナトリウムで保養することによって、子供達は元気になっているということで、集団生活における保養効果とともに、野菜不足の状況の中で野菜・フルーツ・ビタミンの補給効果が大きいということであった。

サナトリウムでの保養の効果を放射線対策の面から客観的に評価したいという考え方があるようだが、「子供達が元気になっている」という事実の確認と、可能ならば「元気度」の評価を行なえばそれで十分だとおもわれる。それ以上の評価を行なう余裕があれば、そのエネルギーを被害者の検診や調査、治療の方に向ける方がはるかにベターであろう。

それにしても野菜・果物・ビタミンの不足は容易ならざる状況であると感じられた。出てくる野菜の大半がキュウリであるということに示されているが、日本の「優秀な」農民がこの状況を見たら何を感じ、どう行動するであろうか。冬期は無理としても、夏期を中心として、はるかに多くの種類の野菜・果物が出回り、自由市場を一杯にするのではないであろうか。（私の母は80才をはるかに過ぎて、今でも田舎で畑を耕している…。）

この点について、現地のY氏に「挑戦的」な質問を行なってみたところ、彼の答えは「それこそ旧ソ連社会主義制度の基本的欠陥……中央指令的経済システムにおける民主主義の欠如に由来するものだ」というような内容であった。彼はまた、「現代社会主义を民

主的に改革するなどということは夢想である」と語った。……

医療機関訪問と汚染地帯調査の合間に中学校やサナトリウムのスポーツ施設などを訪れた。教育とスポーツと言えば、旧ソ連のとくにすぐれた分野として知られていたが、今回の訪問においてもその一端に触れることができて感慨深かった。かつて映画やテレビで何度も見たことがある、ソ連の学校やスポーツ・サナトリウムの実態に接して、こうしたすぐれたシステムを作り出した社会主義の制度と、他方では、 Chernobyl 原発事故を秘密のままに処理しようとはかったソ連の官僚制との間の落差の大きさを痛感させられた。

(2) 支援運動の進め方について

私が国際ボランティア活動に参加したのは今回が初めてであった。これまで、国際ボランティア活動の意義について十分理解できていなかったが、今回の調査団参加によって、多少の理解を持つことができた。

市民のカンパを集めるとそれが数十倍もの金銭価値を持つような発展途上国が数多くあることは、頭の中で理解しても、日本の市民がそのような力を發揮しうる状況に達したことを実体験できたのは感動的でさえあった。

日本は、原発「先進国」であると同時に、公害「先進国」でもある。途上国にとっては、わが国のような公害先進国のあと追いをしないで発展して行

くことは重要な課題であるが、今日それは非常に困難な道であることが明らかになって来ている。ペラルーシやウクライナは現在なおエネルギー危機・石油不足の状況にあり、電力を原発に依存せざるを得ない実情にあるとも伝えられている。私達日本人に、このような「背に腹はかえられない」といった状況を否定することができるであろうか。私達は、原発にかなりの部分を依存した電力を大量に消費しているのである。

今後の支援運動の進め方について感想を述べてみたい。汚染地帯においては、今後数十年にわたって各種のガンや遺伝的影響などが増加していくと考えられる。したがって、これらの疾患を早期発見しうる立場にある第一線の医師、医療従事者に対して、研修の場を提供することは重要な課題である。

問題は、どこで、どのような研修を行なうかということであろう。今回 1 カ月間の研修のために大分を訪れた、 Galina Chernyshova 医師（モズイリ小児病院の小児科医）は、最も勉強にいたところは、大分県立病院小児科の新生児室であったと語っていた。医学、医療の進展の効果は、先ず新生児死亡率の低下という形であらわれるものであり、ガリーナ医師が日本の新生児医療の最先端に位置している当該新生児室に感動したのはよく理解できる。しかし、新生児医療の研修のためであれば、遠くて、かつ言語の壁の大きい日本まで来なくとも、ドイツや西欧諸国の方がベターではなかろうか。

またガリーナ医師は、研修をお願いしたN病院、N医師のもとで甲状腺疾患の診断技術を学んだのであるが、その成果についてはあまり多くをかたらなかつた。

甲状腺ガンの多発→甲状腺ガンの診断技術の必要性→甲状腺の専門医師のもとでの研修 …という発想はやや直線的すぎる感じがする。甲状腺ガンは汚染地帯で増えている健康障害の一つに過ぎない。しかも、第一線で必要なのは、甲状腺腫瘍をスクリーニングする技術であり、確定診断を下す技術が要求されているのではない。

甲状腺の専門医師は、ミンスクにもモスクワにも少なからずいるはずである。ミンスクやモスクワで研修するのと、N病院での場合と、どちらがより効率的であろうか…。

今後も研修を受け入れるとすれば、現地の実情、必要な医学知識・医療技術、研修者の状況と希望、ふさわしい研修の場はどこか…などについて十分検討を加える必要があろう。

参考文献

- (1) 伊勢 泰：チェルノブイリ医療報告書、チェルノブイリ支援運動・九州第一次医療調査団報告、1991.
- (2) 佐藤幸男・他：チェルノブイリ核被災地における後障害の実情報告、広島医学45、1992.
- (3) 飯田 太・他：チェルノブイリ原子力発電所爆発事故による高汚染地域の甲状腺、第一報、内分泌外科、8、1991.
- (4) 同上、第二報、同上、9、

1992.

(5) 石井 淳・他：チェルノブイリ災害—甲状腺への影響と対策、日本医事新報、No. 3495、1991.

(6) 高橋卓志：チェルノブイリの子供たち、岩波ブックレットNo. 308、1993.

(7) 中地重晴：事故後8年チェルノブイリ地区はどうなったのか、環境監視37号、1994.

(8) 朝日新聞、1994年7月7日号

(9) 高橋卓志：チェルノブイリ医療支援の現状、技術と人間1994年4月号。

(10) 秋葉澄伯・他：新しい疫学、日本公衆衛生協会、1991.

(11) J. W. ゴフマン（伊藤昭好・他訳）：人間と放射線、社会思想社、1991.

АЭС — СТРОИТЬ!

Такое решение после бурных дебатов приняла съезда Челябинского областного Совета народных депутатов, обсуждая вопрос о неотложных мерах по оздоровлению экологической обстановки в регионе.

Выбор и впрямь был не-
легким. Достаточно вспом-
нить, какие страсти кипели
в течение последних кипели
тора лет на страницах печа-
ти, экранах телевизоров, ми-
ниграх по поводу того, нуж-
на ли АЭС на Южном Ура-
ле. Область и без того пе-
ренасыщена промышлен-
ными предприятиями, до-
сих пор не оправившись от
последствий взрыва в Заряд-
ье, активных отходов в 1957 году,
обчищена зоной эколо-
гического бедствия...

Между прочим, многие
кандидаты в депутаты на
предвыборных собраниях
выступали против стро-
ительства ятомной электро-
станции. Но после того, как
было глубоко изучили про-
ект, ознакомились с ра-
ботой химкомбината «Маяк»,
выслушали мнение специ-
алистов, ученых, изменени-
ли мнение в пользу АЭС: Аль-
тернативы ей нет.
В. ЧЕРЕПАНОВ.
(корр. «Правды»).
г. Челябинск.



ガリーナさんを迎えて

6月17日～7月17日までの一ヶ月間、大分県にペラルーシから遠来のお客さまを迎えることになりました。

ペラルーシ共和国モズィリ市に勤務する小児科医、ガリーナ・チェルヌイシェバさんという女性です。

セルノブイリ支援運動・九州の第四次調査団がペラルーシを訪れた際、現地から同伴してくることになったのです。現地への医療援助としてセルノブイリ支援運動・九州が以前から送ってきたエコーや血液分析機などの機器を充分活用し、子どもたちの検診や治療を効率よく実施してもらうための研修を目的とした来日でした。

第四次医療調査団には医師に同行していただき、医者の目から現地の実情を調査してもらうという計画が立てられ、医療生協大分協和病院院長の柳榮先生が行ってくださることになりました。

また、子どもたちの間に広がりつつある病気の中で、一番深刻だと思われる甲状腺ガンの勉強には、別府の野口病院が最適だろうということからも、今回の研修は大分県でということに決まったようでした。

これまで事務局は福岡の人たちに担ってもらってきた為、会の運営にはほとんどタッチていなかったのに、

「大分での医療研修のことは全部まかせるから」ということになり、正直、大変な戸惑いを覚えました。

そうしているうちに、事務局長である深江さんを団長として、第四次調査団は、ペラルーシへ行ってしまったのです。十日もすれば、間違いなく女医さんが大分空港に降り立つはずです。私は大あわてで、留守を預かる事務局の鶴田さんと電話連絡を取り合いながら一ヶ月間のスケジュールを最終的に詰めなければなりませんでした。

大分協和病院一大分県立病院一別府野口病院の順で研修日程を組み、その中にいくつかの病院やクリニックの見学も折り込み、土、日を除く全ての日を埋めて、みっちりと研修してもらえるように、いそいで準備を整えました。

メインは何といっても野口病院ですが、その前に行なう協和病院では、エコーの扱い方や診方などの基本的な研修をしてもらい、県立病院では、小児科の最先端の医療現場を研修してもらえるようにセッティングしました。そして最後に、甲状腺治療では全国的に有名な別府の野口病院で、甲状腺の診断と治療について具体的にマスターしてもらうことにしたのです。

その他にも、宿の準備（私の家の近くにアパートを借り、生活に必要な様

々な用具を調達して、セッティングを終えました。）、マスコミへの連絡、そしてグリーンコープ生協との学習交流会等、準備万端整えて、当日を迎えたのでした。

当日大分空港まで出迎え、協和病院の人たちと待ち受ける前に、柳樂先生、グリーンコープ生協大分の代表として派遣された秋月さんと共に、ガリーナさんが姿を見せました。みんな長旅に疲れきった様子です。新聞社の簡単な取材をすませ、早速アパートへと直行しました。

彼女は1951年生まれの43歳。私より4歳年下で、二人の女の子と、お連れ合いとの四人家族だそうです。モズィリ市（人口十万人の汚染地の町）に住み、市で一つしかない子供病院に勤務する女医さんです。ちなみにベラルーシでは、医者の80%が女性で、小児科医は全員が女性なのだとさうです。日本に来て、医者のほとんどが男性という現象に、さぞかしひっくりしたことでしょう。「女性の方が頭いいから、医者はみんな女性なのヨ」と話していました。あちらの国では、女性も一生の仕事を持つ、社会的責任を果しながら生きています。日本のような、「結婚は永久就職」といった考え方は、全くないので、学生の頃からの心がまえが違うのでしょうかね。日本の若い女性たち、ベラルーシの女性に負けないように、大いに頑張ってほしいですね。

さてこちらからの注文に、英語のできる人との条件がありました。ところが、彼女の英語は大変癖の強い発音で、通訳さんもかなり苦労していたよう

す。ベラルーシからのお客さまを迎える度に、ボランティアで英語の通訳をお願いしている若松さんに、初日と次の日、そして最後のお別れの会の三日間、会話の助けをしていただきましたが、実際の病院での研修は、前半は通訳なしで通しましたので、病院の先生方もすい分苦労されたようでした。

後半には、福岡からロシア語の通訳として力強い助っ人（第一次、第三次と、調査団に同行しで現地での通訳として活躍していただいたり、ベラルーシとの交信など一手に引き受けて下さっている菊川さんです）が来てくれ、言葉の壁も一挙に解消したのですが、外国人人と接する度に、言葉が通じないことのどうしようもないもどかしさを味わい、最小限の英会話だけでもマスターする必要性をヒシヒシと痛感してしまいます。八年間も英語を学んでいながら、ろくに単語も思い出せないでいたらくで、全くなきかけないかぎりでした。

とはいいうもの、通訳さんがいない間は、何しか自力でお互いの意志を伝え合わなければなりません。頭の中のひき出しをひっかき回し、かろうじて残っている乏しい単語をかき集めては羅列し、最後には身ぶり手ぶりも動員して、最低限の意志疎通だけはできるようになりました。まことに“必要は発明の母”ですね！！

さて、来日四日目から、いよいよ病院での研修です。大分協和病院に五日間、大分県立病院に九日、別府野口病院に四日間という日程です。

大分県立病院を終えるまでは、協和

病院で宿の面倒をみて頂くことになり、病院内のゲストルームでの快適な生活を保障することができました。二人の先生方ははじめ、事務局の人たち、ナース、栄養士や給食係……院内の全ての人たちが、大歓迎し、心のこもったもてなしをして下さったようです。ガリーナさんも、とても楽しく日本の生活文化を体験しながら研修することができたと、大喜びでした。先生方と船で釣りに出かけたり、近くの夏祭りにも出かけたり、（何とゆかたを着せてもらっていました！）アパートにショッピングに連れていってもらったり、神楽女湖（別府の郊外にある山の中の湖で、見渡すかぎりのあやめで埋めつくされるとても美しいところです）見学の病院行事に同行したり…と、すっかり協和病院に溶け込んで楽しく過ごすことができたようです。

協和病院滞在の最終日の7月7日、院内で、ガリーナさんの為の七夕花火大会が開かれました。大きな笹に、色とりどりの七夕かざりがびっしりとかざられた玄関を出て裏庭へ回ると、患者さんや職員の方たちが大勢で花火を楽しんでいました。スイカも沢山ふるまわれ、それに語り合ったり、写真を撮り合ったりと、なごやかな一夜がふけていきました。ガリーナさんは、日本の夏の夜のひとときを楽しみ、長い間の常宿を後に、お世話になった人々との別れを惜しみながら、別府へと向かいました。いよいよこれからがガリーナさんの苦闘（！？）の日々です。

彼女の為に借りたアパートは、小さな木造の二階建。例年だとこの時季は

梅雨の季節で、それほど暑くない為、冷房設備もない二階の部屋を借りていたのです。ところが、ふたを開けてみると、今年は前例にない猛暑。彼女が来県して以来、真夏の日照りが続きました。寒い国から来た人だし、体型も結構ふくよかで（身長は私と変わらないのですが、横まわりはね私の倍はあります。あちらの国の人々は、中年になるとみんなこうなるようです。きっと食物の関係なのでしょうね）この猛暑はこたえたようでした。昼間は云うに及ばず、夜になつてもいつこうに涼しくならず、文字通りの熱帯夜です。扇風機を回し続けても全く効果がなく、熱風の中で体の熱を発散させる術もないまま眠りにつかなければなりません。横でねている私も苦しくて眠れない夜が続いたのですから、彼女の辛さは想像にかたくありません。（お別れの会のスピーチで、少し涼しくなる明け方の二、三時間眠れただけで、慢性の睡眠不足だと云っていました）これから、ペラルーシの人々を招く時は、真夏の時季は絶対に避けるべきですね。

別府でも、土、日を利用してあちこちを案内し、日本の文化を体験させてあげました。お猿の高崎山・竹の博物館・露天風呂（私たちが座った姿勢で身体を洗うのが不思議に見えるらしく、どうして立って洗わないのかと尋ねられました）水族館・海水浴・地獄めぐり etc…。そして二つのホームパーティーにも招かれ、日本の家族を体験する機会にも恵まれました。医者らしく日頃は冷静でしっかり者の彼女でしたが、生協で汚染地の状況を話しても

らった時は、大きな目から涙がこぼれました。「医者として、母として、放射能は量に関係なく危険なのだと云いたい」と、IAEAの発表を批判し、現実の暗さを力説していました。

遠来のお客さまを迎えて、ドタバタと慌ただしく過ごした一ヶ月間でした。お別れの日の朝、深江さんの車で別府を後にする彼女と抱き合い、再会を固

く約束して涙の別れをしました。汚染地に戻り、これからまた、厳しい現実を前にしての彼女の長い闘いが始まります。いつまでも手を振り続ける彼女を見送りながら、少しでも私たちで手助けできることがあれば…と、私も思いを新たに大きく手を振って応えていました。

河野 近子

九州にいる大勢の友人

ナバト1号(107号) 1994年3月

世界中の人々が、チェルノブイリの大惨事に対し大きな関心を寄せている。故に、他国から無関心な人々では無く、多くの科学者や公的立場の人々がベラルーシを訪れる理由も明らかである。実情を目で確かめ、情報を収集する目的で来る人もいれば、援助や同情からやってくる人もいる。又、例えば良く知られている笹川財団の様に、両者の目的から訪れる専門家もいる。

全く取引とは無縁な、同情心、親切心、寛大な心を持った人々と接觸を持つ事は、喜ばしいことである。1991年夏、彼らは日本チェルノブイリ支援運動代表としてミンスクを訪れた。彼らは、社会的生態学的団体、「チェルノブイリ」のゲストとしてやってきたのだ。その代表団の中には、血液学博士であるイセ・トオル氏、朝日新聞ジャ

ーナリスト、ウラベ・マサヒコ氏がいた。同代表団は、郵便局に勤める普通のサラリーマンであるフカエ・マモル氏が率いてきたものであった。フカエ氏は、40才位だが年令よりも若く見えた。ところで、彼は花咲き乱れる日本南部の島、九州のチェルノブイリ救援活動のリーダーである。

タミヤ・ケイコさん、主婦であるカワノさん、自営業のキクカワ・ケンジ氏、そして通訳の方々がこの運動の大きな要となった。彼らは皆、チェルノブイリ事故を憂慮する立場から互いに知り合った同じグループのメンバーである。後になって判ったことであるが同運動は主として日本で平均収入の家庭の普通の人々によって支えられているものである。しかし、これらの人々は決して単純に普通の人々ではなく、

例えば知性と精神的発展性を兼ね備えた家庭の主婦は、我々の慈悲の心、或いは哲学や日常生活に於ける専門家にも勝るとも劣らないのである。

我々は、彼らに病院を案内しモギヨリフ地域のチャルノブイリゾーンへも引率し、それ以来、お互い協力体制をとっている。1年後、青少年向けリハビリセンター「スイスロッヂ湖畔の九州」を日本側のパートナーと共に、弱った子ども、10代の若者、チャルノブイリ事故で不毛の地と化した生まれ故郷に残された母子を救援する目的で設立した。ありがちではあるが、次のようなことが当地でも起こってはいた。そう望む親がいるからか、或いは軽率な政治家がいるからなのか、本国でのリハビリは、陳腐で不必要的信望の無いものとなり果てていた。例えば、外国のリゾート地の方がいいとか、海外の家庭に滞在した方がいいとか。チャルノブイリの10代の若者は、西側に憤りを感じていた。ベラルーシの人々が他人の費用で手にした「甘いパン」で生活する事に憧れてもいる。

我々は、日本側のパートナーと共に、いくつかのビルを借りて行っているスポーツ複合体、「スタイキー」を基に、活動的リハビリの新たな方法を提案した。

例えば、3月には98名の10代の青少年が彼らの教師や、マリノフカ地域に住んでいるチャルノブイリゾーンからの再定住者、そして小さな子どもを連れた100人の両親らと共にここへやってきた。

年に2回程、ワカエ氏の仲間がリハ

ビリセンター「スイスロッヂ湖畔の九州」を訪れ、医療器具やビタミン剤、薬品を届けてくれる。

我々は既にいくつかのことを経験し、習得してきた。共に努力することによって、我々のリハビリセンターを他の西側ベースの競合施設と真剣に渡り合えるものへと変えていくつもりである。我々のセンターを独自の施設にすべき材料は揃っている。両親、医師、労働組合のリーダーなどもそのことを認識し始めている。労働組合は、我々のセンターでリハビリをする生徒のグループの安定した形成に責任を負っている。そして、これらグループの配置でさえリハビリの過程の全要素、日常の決まり事、文化プログラムを完全に達成させる上で、非常に重要なのである。

率直なところ、全般的にスポーツ複合体「スタイキー」は、過小評価されている。現在までのところ、以前の体制のまま運営されており殆どスポーツマンを対象としている。チャルノブイリは、彼らを興奮させ、生き残りという概念や、我々と子孫の将来に取り組む目的を持った整然とした物理的スポーツセンターになっていたかもしれないのに。今現在、青少年リハビリセンターとベラルーシ共和国自然科学文化アカデミーとの間の協力は、その輪郭を描いている段階である。しかし、その輪郭もほんの僅かなものである

1993年秋、エレナ・ルデンコ率いる少年聖歌隊ダンスアンサンブル「パレスチカヤ・ゾーラチカ」が、九州を訪問し、大きな成功を収めた。この訪問は、12人のモズイリ市の少年

少女にとっての最高の時であり、正に東洋のおとぎ話であった。社会エコロジー同盟「切尔ノブイリ」が、ロシアでカンシャ・タエコの著書「まだ間に合うのなら」を発行した。同著は、原子との戯れの論理的終結として環境的見地から切尔ノブイリの人々に捧げられたものである。ところで、著者のカンシャさんも又、主婦である。彼女は、次回の我々のゲストである。現在、九州には多くの友人がいる。

ここで、ペラルーシの清浄な地域で切尔ノブイリゾーンのリハビリさせるという素晴らしい構想が、一つの条件下で更なる展開をみせるであろうということを一言述べる必要がある。即ち、日本のみならず、多くの善意を持った人々からの理解と支持を得られれば、という条件である。我々のサナトリウムである「九州」は、日本人がそう呼ぶ様に、実に簡潔明白な名前ではあるが、主として、慈善基金により運営されており我々の口に入る毎回の食事に感謝している。というのも、わが国に於けるエネルギー、総合危機という条件下、我々は非汚染食物、ビタミン、医薬品そして交通設備に対する基金でさえ不足しているからである。加えて、社会エコロジー同盟「切尔ノブイリ」は、土壤改良や非汚染食物生産プログラムを行っている。

我々は、又学校や幼稚園の教育に新たな教育的概念、「生態学的政策、文化、健康」を導入し我々の未来へ繋ごうとしているところである。又、「ナバト」誌も発行している。

ここ数年、我々が取り組んできた全

ての事は、国民と国家の生き残りをかけたものであり計り知れない程貴重なことでもある。善良な心、同情心、そして友情は又、値段の付けられないほど貴重なものであり、故に、我々は世界中の様々な国にいる全ての友人に頭を垂れて感謝すべきなのである。

最後に、海外的好奇心の強い、寛大な心を持つ全ての読者に同組合の通貨口座についてお知らせしよう。

通貨口座：U S ドル払い、
口座番号 04-094-577
Priorg 銀行、ミンスク
ニューヨーク、バンカーズトラスト社
703547
社会エコロジー同盟「切尔ノブイリ」
まで

Мох, наш Мох!

Утро. Влажная дымка не дает пробиться солнцу. Мы с сыном вышли на огород: готовились к севу. Выгнутое солнце, и мы целый день радовались ему. Сначала работали, а после обеда всей семьей поехали на "Москича" в лес.

Через день – опять за березовым союм. Там, в березнячке за Соколовкой, собирали сюх рабочие. Мы разогнали костер, жарили сало, пили соек. Было интересно и радостно. Сох привезли лыжой, угощали знакомых и друзей. Поставили его в погреб и пили все лето.

Солнечный день был и на 1 мая. Вокруг красненько-красно от флагов. Все улыбаются, радуются. Мы проходили мимо трибуны и кричали: "Ура! Слава КПСС!"

В мае к нам в Кривое приехали ветераны-освободители. Мы вручали цветы и подарки. На Кургане Славы много детей и взрослых. После митинга был концерт и ярмарка.

Целое лето мы с родителями ездили под Чернобыль, собирали ягоды Саланского озера чернику, землянику и грибы. Купались в Соже, загорали.

Осенью я пошел в первый класс. В нашей школе выступали ветераны войны и труда. Продолжали уроки мира. Позже все готовились к празднику – 850-летию Кривого. Снова в городе был праздник. И снова красные флаги, красные речи и песни.

Чернобыль нам стало известно в 3-4 классах. Говорили, что реактор взорвался от нас далекий. И ни слова о том, что пострадали от взрыва теракта наш район и город. Об этом вскоре мы самы стали догадываться.

Со мной училась Алекса Мельникова. Ее родители построили новый деревянный дом. Жили в нем годы три, а потом Алекса заболела. Вызвали санитаров. Когда измерили радиацию, она оказалась выше нормы. Как выяснилось, дом построили на холмистом полу – он был радиоактивный. Позже, за счет Госкомпотребнадзора мы построили новый дом, а Алексеи дали путевку в санаторий. Но не одна Алекса болела и болеет.

За последние годы я и мои одноклассники отыскали в Нальчике и Витебске. А в прошлом году вместе с ребятами из Ботвиновки, Осаниц и Сычика, где большая радиация, побывали в Германии. За два с половиной часа самолет доставил нас в город Гютерсло (земля Северный Рейн). Поселились в немецких семьях, тоже имеющих детей. Мы хорошо понимали друг друга, да и переводчиков было много; ведь там жили беженцы из Казахстана и России.

Меня посыпали в красивый деревянный дом Мехтишлыды и Вильгельма Гроффера, у которых трое детей – мальчики Макс, Тило и Ри. Нас во-

「研修成果 治療に活用」

ペラルーシ きょう帰国
の女医さん



松本副院長（右側）の説明を聞く切尔ヌイシェバさん（別府市・松本小児科）

旧ノ連の切尔ノブリ原発事故で被災した子供らを治療している女医が、大分、別府市の病院で一ヶ月間の研修を終えた。切尔ヌイシェバさん（ウクライナ共和国）に近いペラルーシ共和国のガリーナ・切尔ヌイシェバさん（四三）で、十七日て大分を離れ、子供たちが待つ病院に帰る。

切尔ヌイシェバさんはペラルーシ共和国のモズリ市第三子供病院の小児科医。甲状腺（せん）などを専門としている。モズリ市は切尔ノブリ原発からわずか數十キメトであり、原

事故による汚染を受けていた。周辺は事故から八年後も現在も放射能のレベルが高い。

研修は、市民グループ「切尔ノブリ支援運動」九州（深江守代表）が医療研修生として受け入れたことから実現した。切尔ヌイシェバさんは六月十七日に来県。大分市の太分協和病院、県立病院、別府市・野口病院、松本小児科で甲状腺治療、医療機器の操作などの研修を続けた。

十四日、最後の研修先となつた松本小児科では、松本園院長、松本重孝副院長が幼児や児童の医療について説明した。切尔ヌイシェバさんは「子供たちの治療に答えてくれ、感謝している。日本の医療機器は非常に進歩している」と感想。また切尔ノブリ事故後、子供たちの間に甲状腺がんが増加している実態に触れ、「今回、甲状腺のさまざまな症状を研修した。」と話していた。

支援活動の問い合わせは北九州市八幡東区春の町一・三一七、日開社2号「切尔ノブリ支援運動」九州（☎093・681・1780）へ。

発事故による汚染を受けて

本園院長、松本重孝副院長が幼児や児童の医療について説明した。切尔ヌイシェバさんは「子供たちの治療に答えてくれ、感謝している。日本の医療機器は非常に進歩している」と感想。

松本小児科は切尔ヌイシェバさんの病院に中古のボータブル心電計をプレゼントした。切尔ヌイシェバさんは「子供たちの治療に必要な薬品や医療機器が絶対的に不足している。できるなら、支援の手を差し伸べてほしい」と訴えていた。